
旨い酒と生きる意味

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旨い酒と生きる意味

【Nコード】

N3109Q

【作者名】

春後秋前

【あらすじ】

生きる意味を一瞬失った男と、
酒を溺愛する女。

二人の相談で男は見つけたが、
貴方にも生きる意味が見つかれば幸いです。

「おや」

女は柔らかい笑みを見せた。しかし目は笑っていない。彼女独特の笑い方である。

長つたらしい着物を持ち上げて、女は縁側に座った。

「珍しいでは無いか。お前が、このような所で酒を飲むとは……私も混ざって良いだろう？」

「……………ああ、あんたか」

縁側に寝そべっていた男はむくりと起き上がった。夜の涼しい風が、頬を撫でていく。

そして、額に引つ付いた髪の毛を整えた。少し赤面している所から、軽く酔ったのが目に見える。

「どうした？ ヤケ酒、とやらか」

女は気難しそうな顔で尋ねる。

男は、苦笑してそれに答えた。

「ヤケ酒は酒が勿体無いと、いつも止めるのはあんただろう」

「そうだ。だからこうして尋ねている」

「？」

「私があれば強くヤケ酒は止めろ、と言ったのに、ヤケ酒をしている理由はなんだ。それ程のものなんだろうな？」

どこか厳しい目で睨む女。それに対して、男は押し黙る事で答えた。

だが睨み続ける女を見て、男は溜息混じりで答える事にした。

「ヤケ酒なんて、してないけど……？」

「ほう。酒の味が分からぬ男だとは思っておったが、ここまでとはな」

「は？」

「これは安酒だ。しかも、私の好きではない酒だ。というよりも酒に含みたくない程の」

「……っ」

男は慌てて手にしている猪口を見る。そして、迷わずに一口含んだ。

その顔が、みるみるうちに青ざめていく。

そして、青ざめた顔で言った。

「本当だ、こりや不味い」

「不評の中の不評の酒だろう？ 安さだけが取り得の酒とも言いたくない、という思いを隠さずにさらけ出す女。

「その酒だからこそ、今お前を私は叱りつけなかった。それで無かったら、ここから蹴り落としていたぞ、阿呆め」

「……ヤケ酒してる訳じゃ無かったんだけどなあ」

「してる訳もしてない訳もあるか。お前はしてたんだ。それは事実だ」

「……」

「お前も好まぬ酒に気付かず、飲んだ。それより大事な事が合ったから、味も気にならなかった。違うか？」

「……仰るとおり、だろうな」

「良い酒があるぞ」

線を塗りたくった様なラベルの瓶を出してくる女。

男には恥ずかしながら文才が無いので、その名が読めなかった。

「何ていう酒だ？」

「人樂。太古の文字だ、読めなくて仕方が無い。と、お前は現代文字も読めないのであつたな。失敬」

「わざとだろ？ 今のわざとだろ？」

「放っておけ。老婆の小さな快樂よ。ほれ、飲んでみる。酌してやる」

「あ、ありがと」

とぶとぶと注ぎ込みつつ女は、また独特な笑みで笑う。

その酒を旨そうに飲み、男もまた笑った。

「やっぱ上等な物は違うわぁ」

「だろう？ さぁ飲め。そして語れ」

「？」

「何があつたんだ？」

「あー」

男は苦しそうに笑った。

「何で俺、生きてるんだろう。って思つてさ」

「は。お前らしい小さな迷いよ」

「何だと。俺にとっては一大事だよ、ったく」

不貞腐れたように言う男に、女はカラカラと笑い声で返した。

そして女も酒を飲む。猪口に丸い月が浮かんでいた。

それも味わいつつ、女は語る。

「私にとっては、余程の美味しい酒こそが手に入らぬ事。これが一大事だ。ロクに酒の味も分からぬ小童どもに、上辺面だけ『美味しい』と言われ飲まれる。それこそ最大の屈辱よ」

「……俺の事じゃ、無いだろうな？」

「お前はまだマシな方よ。酒を飲む時にしつかと、本質を味わつておる。お前の酒に対する評価は好きだ。お前自身も面白いしな」

「ありがとうと答えておこう」

「で？ お前はそれ以上の一大事があると申すのか？ 言ってみろ」

「……言われた」

「は？」

女は酒を入れながら尋ねた。

男は言いにくそうに、だが言う。

「夢、だけだよ。お前は要らない、生きる価値も無い、って言われたんだ。それで、まさしくそうだな……って夢の中で、死んだ。はは、本当涙出るほど悔しかったけど。死んだ後は楽だな、って漠然って思つた」

「……」

「みんなにな、後ろ指指された。」

『お前が生きるだけで、誰かが死ぬ。お前が死ねば、誰かが生きる。お前が笑えば、誰かが泣く。お前が泣けば、誰かが笑う。お前は常に、要らない物なんだ。早く逝ってしまえ、逝け』ってね」

「……」

そこで、笑える場面では無いに関わらず、女が笑い出した。男は拍子抜けして驚いてしまう。

だが、女は笑いながら言った。

「いいでは無いか！ お前は要らぬ物だ！ ふふふ、その誰かにとつてお前は要らぬ物だ！」

「……いや、それはそうだけど」

「つまり、私も要らぬ物だ。その理論で言えばな」

「そ、それはそうなるけど」

「なら私は要らぬ物で構わない。断然構わぬよ」

「何で？」

男は無邪気に問い返した。

女はにやりと独特な笑みを見せる。

「それを言った『誰か』も、私にとっては要らぬ物だ。という事だよ」

「ああ、そういう事」

「そうすれば、世界中の人間が要らぬ物になってしまう。ふふ、そうなれば要らぬ物なんて居なくなってしまうだろう？ 人間が人間に、お前は人間だと罵っても意味は無いからな！」

「それはそうだけど」

「それに気付いた私達の方が偉い。お前は気にしなくていい。それに」

女は急に真顔になった。

「お前、私の昔話が聞きたいと前々から言っていたではないか」

「う、うん。時々聞かせてくれる話が、とても面白くて」

「じゃあそれでいいじゃないか。それを聞く為に生きてます、と」

「あんたが死んだら終わりじゃん」

「私は死なないが――」

女は絶対なる自信をちらりと見せた後、言った。

「そうなれば、お前がまた新しき子にそれを繋げばよろしい。そういう話だ」

「どういう話だよ」

「要約すれば、生きる意味だと死ぬ意味と同様にたくさんあるという事だ」

「はあ」

「そうならば生きてる方が面白いぞ」

にこにこしつつ女は言う。

そして、愛しい酒を見つめて言った。

「それに、死んだら酒は飲めないしな」

「はいはい。何だか面倒くさくなってきた。今日はもう飲もう」

「これ！ ヤケ酒はするでない！」

「……生きる理由決定」

「ん？」

「『死ぬまでに高価な酒でヤケ酒をする』、これどう？ ついでにあんたも一緒に」

「ふん」

女は苦笑いした。だがすぐに独特な笑みを見せる。

「そうだ。それくらい気を抜いて生きれば、酒も旨い」

男はその横顔を見つめた後、酒にもう一度浸った。

すぐに、味わえ！ と殴られたが。

パツと思いつき。

ホリック、っていう漫画思い出して衝動書き。
短編でございますー。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3109q/>

旨い酒と生きる意味

2011年1月21日20時25分発行